河原典史　編著
『カナダ日本人移民の子供たち―東宮殿下御渡欧記念・邦人児童写真帖―』
三人社　2017年2月　297頁　2,800円＋税

本書は，皇太子殿下の渡欧を記念して1921（大正10）年に発刊された写真帖の復刻に，解題や資料が追加されたものである。後の昭和天皇は，皇太子時代の1921年3月3日から9月3日まで，イギリス，フランス，ベルギー，オランダ，イタリアのヨーロッパ五か国を，軍艦香取で歴訪した。当時のカナダで生まれた日本人二世を収めた写真帖が『金田之栄』であり，本書に当たる。この写真帖には，「東宮殿下御渡欧記念」と「邦人児童写真帖」という副題がつけられている。渡欧の記念写真帖は国内ではいくつか発刊されたが，編著者によれば，この写真帖は日本の研究・教育機関では所蔵が確認されていない。

本書の構成は以下のようになっている。

・カンバーランドを訪ねて
・Treasure in Canada : Kanada no Sakae Commemoration of Visiting to Europe of Hirohito Photo Album of Canadian's Children －my appreciation for reprinting－
・Summary of Treasure in Canada : Kanada no Sakae
第Ⅰ部　『東宮殿下御渡欧記念　金田之栄－邦人児童写真帖』復刻版
第Ⅱ部　解題『東宮殿下御渡欧記念・邦人児童写真帖』の発刊をめぐる日本とカナダ
第Ⅲ部　資料『東宮殿下御渡欧記念・邦人児童写真帖』に収められた子供たち
・子供たちとの出会い―おわりにかえて―

上記のように第Ⅰ部から第Ⅲ部に加えて，まえがき的な内容が日本語と英語で二編書かれている。そのうち，英文はバンクーバー日本語学校の先生内藤邦彦氏によって書かれている。また「カンバーランドを訪ねて」は，東京移民合資会社を通じた日加用達会社による集団的な契約移民の隊長であった角田泰一郎の姪に当たる髙木里美氏によって寄せられた。熊本日日新聞に掲載された編著者の調査研究の記事に結び付けられて，家族の記憶と，手元にあった写真や文書が研究対象として活用されたことへの喜びと感謝がつづられている。移民としての親族の苦労や，その稼ぎに支えられた日本の家族とのつながりと生き様が，自身の記憶と重なる感慨が感じられる。さらに新たな出会いを生んだことへの感謝などが記されていることから，本書は歴史地理研究の成果と方法論が社会に還元された好例であり，今後の歴史地理学の社会貢献の一つの方向性を示す業績となるように評者は感じている。

以下では第Ⅱ部の編著者による解題を参考にしながら，写真帖の紹介をしていきたい。

第Ⅰ部の写真帖は，カナダバンクーバーの日本人街にある広島屋旅館・佐藤事務所から発行された。編集兼発行者は佐藤茂平とある。表紙に続いて，「賜天覧台覧」と書かれたページがあり，次に「金田之栄」の書と「四海同胞」の書のページが綴じられている。「金田之栄」の書は「日本資本主義の父」と称される渋沢栄一によるもので，「四海同胞」の書は添田壽一によるものである。そして序文「晩香坡生レ日本人児童写真帖序」が当時貴族院議員であった阪谷芳郎によって書かれている。

阪谷の序文によれば，添田は北米移民の発達に熱心な尽力者であった。添田は筑前国出身，東京帝国大学を出て，大蔵省を経て経済界で活躍していた。その大学時代の同級生が阪谷であり，添田からバンクーバーの佐藤と東京在住の息子・志朗を紹介された。佐藤らは阪谷によって渋沢財団に紹介され，渡米後に記念写真帖を発刊した経験のある渋沢財団から，記念写真帖発刊のノウハウが伝えられたようである。

序文には「愚行ヲ慎ミ勤勉ニシテ善ク土地ノ風俗ニ同化スルコトヲ力メタリ」と，当時のカナダ日本人社会の様子が書かれる。また写真帖に載せる多数の児童が，純然たるカナダ産の日本人種に属し，即ちカナダ人であり，これが真の大和民族の海外発展であると語られる。さらに二世はカナダ人として活躍すること，このようなカナダ人が増え，世界の文明に貢献し，その中から重要な人物が現れ，カナダの歴史に光輝が加えられることを熱望すると書かれ，二世たちへの熱い期待が読み取れる。

続く佐藤の緒言は活字で書かれる。そこには，日本民族が初めてカナダに移住してから40年たっ

たこと，今日では移住の初期とは異なり，定住して家庭を成す者が多いこと，出生の増加は民族の将来にとって最も偉大な勢力の一つであることが述べられている。緒言に続く凡例のページには，「金田之栄」という命名の理由は，古語「天之益人」にちなんでカナダで日本人が増えていくことを願ったことが示される。

発刊の背景については，第Ⅱ部の解題において，編著者により説明される。1875（明治８）年以降，多くの日本人が，サケ缶詰産業や製材業を中心とする労働者や鉄道工夫としてカナダに渡った。しかし，日本人の活躍が現地の労働市場をおびやかすこととなり，1907年にバンクーバー暴動が起きた[1]。翌年，レミュー協定により日本人の移住が制限されたが，写真婚による女性の渡加は認められ，それ以降，日本人社会では家族の形成と二世の誕生がみられるようになった。序文での表現や，時代情勢を考えると，本写真帖の発行目的の一つに，二世の活躍の誇示があったことは明らかであろう。

第Ⅱ部の解題は，以下のように構成されている。

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　写真帖を編んだ人びと
Ⅲ　『大陸日報』にみる発刊の経緯
Ⅳ　大江印刷所の諸相
Ⅴ　写真帖に写る子供たち
Ⅵ　カンバーランドの日本人
Ⅶ　研究の還元から歴史の還元へ
　　―おわりにかえて―

Ⅰ，Ⅱの内容についてはすでに触れてきているが，編著者はその他の移民関係史料を参考にしながら，発刊の背景や関連の人々について，解説を加えている。発行者である佐藤は，渡加後に旅館業を営み，その屋号に出身地名を入れ「廣島屋」とし，仏教会や広島県人会の創立にも尽力した。また第一次世界大戦にカナダ兵として出兵した日本人の慰霊や，バンクーバー日本共立学校の維持にも尽力しており，本写真帖についても，殿下の渡欧前年から刊行を計画していた人物であった。

Ⅲでは，当時の日本語新聞『大陸日報』の記事をもとに発刊の経過が説明される。「在留同胞の花である子供の写真帖」は，10年後の青年の幼顔を記念する出版物として，佐藤による母国訪問団の組織と関わって準備が進められていた。掲載された写真は，予約した子供を写真師が出張して撮影したものである。日本で最も鮮明に印刷することも企画されていたため，持ち込み写真は佐藤母国訪問団の出発までに提出することとされ，遅れた場合には写真師によって横浜へ郵送された。

Ⅳでは，印刷者である大江印刷所と，製版兼印刷者である大江太について書かれる。大江は，工部省や大蔵省に勤め，岩手県選出議員になり八重山糖業株式会社取締役，東京米穀取引所理事長などを歴任した父を持つ。西洋木版術を学んだ後，1894年に製版印刷業を創業し，日本で初めて三色版の出版に成功したとされる。大江印刷所は職工16名で創業したが，本写真帖の出版当時は，職工109名を有する工場に発展していた。

製本は，結局，訪問団の横浜出向時に間に合わず，後発便でバンクーバーに到着した。移民政策の重鎮たちの題辞や序文を収めた重厚な写真帖は，予期以上に美装されていると好評であった。印刷の経緯や体裁からも，皇太子殿下の御渡欧を機に，カナダ日本人移民の今後の発展を期待する企画であったことがうかがわれる。

Ⅴでは，写真帖の子供たちについて解説される。写真帖には，合計259家族，546人の子供たちの写真が収められている。それぞれの写真の下には，居住地，保護者の氏名，続柄，名，誕生日，出身地が書かれている。これらをもとにどこの子供たちが撮影されているのか，地域別に集計された結果をみると，BC州で日本人が最も多く居住したバンクーバーの子供たちが132人（66家族），カンバーランド94人（39家族），和歌山県出身者を中心にサケ缶詰作業に携わった日本人が居住したスティーブストンは41人（17家族），イチゴ栽培に多くの日本人が従事したポートヘネーの41人（16家族）などが収められている。

多く写っているのはカンバーランドやブリタニアビーチなど，鉱山集落の子供たちである。特にバンクーバー島中央部のカンバーランドについては，全体の約15％に当たる子供たちが収められている。地域的な偏りは，先の撮影方法で説明された出張撮影という状況が影響しているようだ。出張撮影で記念写真的に撮られたものに対して，個別に撮影された写真には家族の様子が垣間見える

ものもあり，緊張した子供たちの面持ちだけでなく，日本とのつながりなども見えてきて興味深い。

カンバーランドの移民の状況についてはⅥで詳細に書かれている。神戸移民会社（後の明治移民会社）によって1891年に広島県から100名，翌年には福岡県から73名がカンバーランドのユニオン炭鉱へ出稼ぎに渡った[2)]。1920年頃にはカンバーランドにはイタリア人100人を含む白人500人，中国人900人，日本人150人が就労していた。労働者の妻子を含めると，当地には日本人220人以上が居住していた。

このうち本写真帖に最も多くの子供たちが写されているのは，熊本県出身者である。背景には，前述の日加用達会社による集団的な契約移民の隊長であった角口泰一郎の存在があった。親族に残された手記からは，自身の渡加の経緯や，カンバーランドの状況をうかがうことができる。

Ⅶでは，本写真帖によって明らかになった，日本人二世の居住地や，彼らの父親たちの出身地に加えて，20年後に刊行された在カナダ人名録[3)]などを併用することで，その後若者たちがどのように移動し，就業したのか，実証可能な歴史がまた見えてくることが指摘される。

第Ⅲ部は，資料編になっており，写真が収められた子供たちについて，氏名や保護者名などのデータがが五十音順に並べ替えられ，同様の内容が英語でもアルファベット順にデータベース化されている。

バンクーバー日本語学校の校舎改修時に発見された写真帖が，本書として復刻刊行されるまでの経緯や，それにまつわるカナダと日本での人々の交流については，本書をご覧いただき，子供たちの表情から数々のファミリーヒストリーを読み取ってみてはいかがだろうか。

（山近久美子）

〔注〕

1）和泉真澄「バンクーバー暴動再考―環太平洋の国際動静と日本人移民―」米山裕・河原典史編『日本人の国際移動と太平洋世界―日系移民の近現代史―』文理閣，2015，146-162頁。

2）佐々木敏二『日本人カナダ移民史』不二出版，1999。

3）大陸日報社『在加奈陀邦人々名録』，1941，佐々木敏二・権並恒治編集・解説『カナダ移民史資料　第6巻』不二出版，2000所収。